## 自立の思想

インターナショナリズムにどんな虚像をももたないということを代償にしてわたしならば日本の大衆を絶対に敵としないという思想方法を編みだすだろうし，編みだそうとしてきた。井の中の蛙（かわず）は，井の外に虚像をもつかぎりは，井の中にあるが，井の外に虚像をもたなければ，井の中にあること自体が，井の外とつながっている，という方法を択（えら）びたいとおもう。これは誤りであるかもしれぬ，おれは世界の現実を鶴見ほど知らぬのかも知れぬ，という疑念が萌（きざ）さないではないが，その疑念よりも，井の中の蛙でしかありえない，大衆それ自体の思想と生活の重量のほうが，すこしく重く感ぜられる。生涯のうちに，じぶんの職場と家をつなぐ生活圏を離れることもできないし，離れようともしないで，どんな支配にたいしても無関心に無自覚にゆれるように生活し，死ぬというところに，大衆の「ナショナリズム」の核があるとすれば，これこそが，どのような政治人よりも重たく存在しているものとして思想化するに価する。ここに「自立」思想の基盤がある。

（注）文中の「鶴見」は，評論家で，プラグマティズムの日本への紹介者として知られる鶴見俊輔（つるみしゅんすけ 1922～2015）のこと。吉本は欧米の「進んだ」思想を基準として日本の大衆を遅れた者，誤った思想にとらわれる者であるとして裁断する鶴見の考えに反対する立場からこの文章を書いている。

（『日本のナショナリズム』「吉本隆明全著作集」13　勁草書房）